

駄科権現堂遺跡

安宅3号古墳

2006年3月

長野県飯田市教育委員会

駄科權現堂遺跡

安宅 3 号古墳

2006年3月

長野県飯田市教育委員会



S B01出土土器



安宅 3 号古墳



権現堂 1 号古墳

序

飯田市は、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統文化をもつまちとして知られています。近年の発掘調査による新たな発見により、当方の古代の様子がしだいに明らかにされつつあります。こうした古代人の足跡を追ってみると、古代の人々の生活域とわれわれ現代人の生活域とがかなり重なりあっていると理解されます。そうすると一見、人々の営みは、それほど大きくは変っていないようにも思われますが、近年私達の生活スタイルは大きな変化をとげており、土地開発の姿も多様化する中で、過去の人々の営み（歴史）を解明する遺跡などを後世に伝えていくのは、大切であるとともにたいへん難しいことであることを強く感じます。

今回発掘調査を実施した駄科権現堂遺跡は、かつて宮城遺跡として昭和48年に発掘調査が実施されました。その時にみつかった縄文土器には土器全体に複雑な文様が施され、それを見ると縄文人がいかに豊かな想像力と創造力を持った人たちであったことかと驚くばかりです。今回の調査でもその一端を窺う住居の跡や土器等が発見されています。

また、この遺跡内には、当方を代表する前方後円墳の一つである権現堂1号古墳が存在することもこの遺跡の大きな特徴です。新たに未認知の古墳の存在も確認でき、古代より重要な意味をもつ地として、様々な土地利用をされながら現代につながっていることを強く感じます。

失われていく文化財を記録保存という形で残すことは次善の策ではありますが、こうした記録が残され、地域の資源として有効に活用されることを願うばかりです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、多大なるご理解とご協力をいただいた木下幹夫氏及び発掘・整理作業に従事された皆様に、多大なる謝意を申し上げる次第であります。

平成18年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊澤宏爾

例　　言

1. 本報告書は集合住宅建設に先立ち実施された、飯田市竜丘地区駄科所在の埋蔵文化財包蔵地駄科権現堂遺跡・安宅3号古墳の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は木下幹夫氏からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
3. 今回の調査は、当初駄科権現堂遺跡として調査を実施したが、調査により新たに1基の古墳を発見したことにより、駄科権現堂遺跡・安宅3号古墳としてそれぞれ調査を行った。
4. 駄科権現堂遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、VII-L C 94-2 10-25.26に位置し、グリット規定は新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社 ジャステックに委託した（本文第3図参照）。なお、座標は世界測地系を用いている。
5. 駄科権現堂遺跡・安宅3号古墳の発掘調査及び整理作業には、略号DGD1242-3を用いた。また、遺構には次の略号を用いた。竪穴住居址-SB、土坑-SK。
6. 本書の記載は遺構順とし、遺構ごとに本文・遺構・遺物図・写真図版を掲載した。
7. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 2004 『新版標準土色帖』による。
8. 実測図において、遺構図中のスクリーントーンは炭化物及び焼土の範囲を示し、数字は床面からの深さを示す。石器実測図中の←T→は刃潰しを示す。土器断面の□は縄文土器・土師器、■は須恵器を示している。また、土師器内面の▨は黒色処理を示す。
9. 遺構写真は発掘調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト 杉本和樹氏に依頼した。
10. 石室石材および石器石材については、飯田市美術博物館の松村武氏に教示いただいた。
11. 本書の執筆・編集は瀧谷恵美子が行い、加筆修正・総括を小林正春・馬場保之が行った。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

卷頭図版

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 経 過	1
1. 調査の経過	1
2. 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	6
第Ⅲ章 調査結果	10
1. 遺跡の状況	10
2. 基本層序	10
3. 造構と遺物	12
(1) 繩文時代	12
① 竪穴住居址 (S B)	
② 土坑 (S K)	
(2) 古墳時代	22
① 安宅 3号古墳	
② 横現堂 1号古墳	
(3) その他の造構・遺物	31
① 周辺ピット	
② 造構外出土遺物	
第Ⅳ章 まとめ	33
報告書抄録	39

第Ⅰ章 経 過

1. 調査の経過

平成16年2月16日付、飯田市駄科1240番地 木下幹夫氏より、飯田市駄科1242-3における「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出された。工事計画は鉄筋コンクリート2階建ての集合住宅を建設するものである。

工事計画地は埋蔵文化財包蔵地 駄科権現堂遺跡にある。この一帯は、縄文時代中期および古墳時代後期の集落址として知られている。昭和48年度には農業構造改善事業に先立ち発掘調査を実施し、縄文時代中期の集落が確認されている（旧宮城遺跡）。また、全長約60mの前方後円墳である権現堂1号古墳を中心に、東側には権現堂2号古墳、神送塚古墳、井ゾエ1・2号古墳、ツカノコシ古墳といった円墳があり、西側には安宅1・2号古墳が存在することから、当該地周辺は古墳時代には墓域として位置付けられていたと考えられる。

前述のような状況から、木下幹夫氏と飯田市教育委員会とで協議し、工事に先立ち試掘調査を実施し、その結果により再協議することとした。平成16年4月5日に試掘調査を実施したところ、新たに古墳の周溝を確認し安宅3号古墳とした。建物基礎の深さは1m程になるが、試掘調査の状況から工事により遺構が壊されると判断した。再協議の結果、工事実施前に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなつた。

これに基づいて、平成16年4月13日に、木下幹夫と飯田市長との間で、「飯田市竜丘地区（平成16年度）埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

平成16年4月14日より現地における発掘調査を実施した。同日、重機により表土剥ぎを行い、15日に新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく測量作業を委託実施した。16日より作業員を入れて発掘調査を開始した。遺構の確認・掘り下げ・実測・写真撮影を順次行い、5月14日に現地での発掘作業をすべて終了した。なお、4月29日に現地見学会を実施し、約50名の参加があった。引き続き、飯田市考古資料館において、出土遺物や現地で記録された図面・写真類の整理を行い、概要報告書を作成した。

平成17年度は、同館において出土遺物の注記・接合復元・実測・写真撮影や遺構・遺物のトレース・版組等の各作業を行い、本報告書を刊行した。

なお、発掘作業については、以下に作業日誌（抜粋）を掲載する。

平成16年4月14日（水） 重機による表土剥ぎ

4月15日（木） 測量作業、発掘器材搬入

4月16日（金） 古墳周辺の遺構検出

4月19日（月） 墓丘部分にトレンチ設定、周溝検出、石室石材とみられる石の検出

4月20日（火） トレンチ掘り下げ、石室石材周囲の掘り下げ、東側調査区遺構検出

4月21日（水） 石室石材周囲の掘り下げ、周溝掘り下げ、東側調査区掘り下げ

4月22日（木） 周溝掘り下げ、東側調査区掘り下げ

- 4月23日（金） 周溝掘り下げ、墳丘上の遺構検出、石室石材周囲の掘り下げ
- 4月26日（月） 周溝掘り下げ、葺石確認、古墳平面実測、竪穴住居址検出、土坑掘り下げ、
権現堂1号古墳周溝掘り下げ
- 4月27日（火） 雨のため作業中止
- 4月28日（水） 周溝掘り下げ・断面実測写真、葺石平面実測、SB01掘り下げ、権現堂1号
古墳周溝断面実測、東側調査区遺構掘り下げ
- 4月29日（木） 現地見学会
- 4月30日（金） 周溝断面写真・実測、葺石平面・側面実測、SB01掘り下げ、権現堂1号古
墳周溝断面写真・実測、東側調査区掘り下げ
- 5月6日（木） 周溝断面・葺石実測、SB01掘り下げ、権現堂1号古墳周溝平面実測、土坑
掘り下げ、基本層序実測
- 5月7日（金） 土坑掘り下げ、SB01掘り下げ
- 5月10日（月） 雨のため作業中止
- 5月11日（火） 周溝掘り下げ、葺石実測、古墳全景写真、SB01・SK01・SK02掘り下げ
- 5月12日（水） 葺石実測、SB01掘り下げ、SK01～06掘り下げ・写真・平面実測
- 5月13日（木） SB01掘り下げ・写真・実測、SK実測
- 5月14日（金） SB01掘り下げ・写真・実測、遺跡全景写真、発掘器材搬出

2. 調査組織

（1）調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田 泰啓（～平成17年3月）
伊澤 宏爾（平成17年3月～）

調査担当者 濵谷恵美子

調査員 馬場 保之 下平 博行 坂井 勇雄 佐々木嘉和

作業員 金井 照子 北原 裕 小島 康夫 小平まなみ 斯波 幸枝

瀬古 郁保 竹本 常子 橋 千賀子 林 伸好 福沢 育子

牧ノ内昭吉 松井 明治 松下 省三 松本 恵子 森藤美知子

柳沢 謙二

（2）事務局

飯田市教育委員会

尾曾 幹夫（教育次長 ～平成16年度）

中井 洋一（教育次長 平成17年度～）

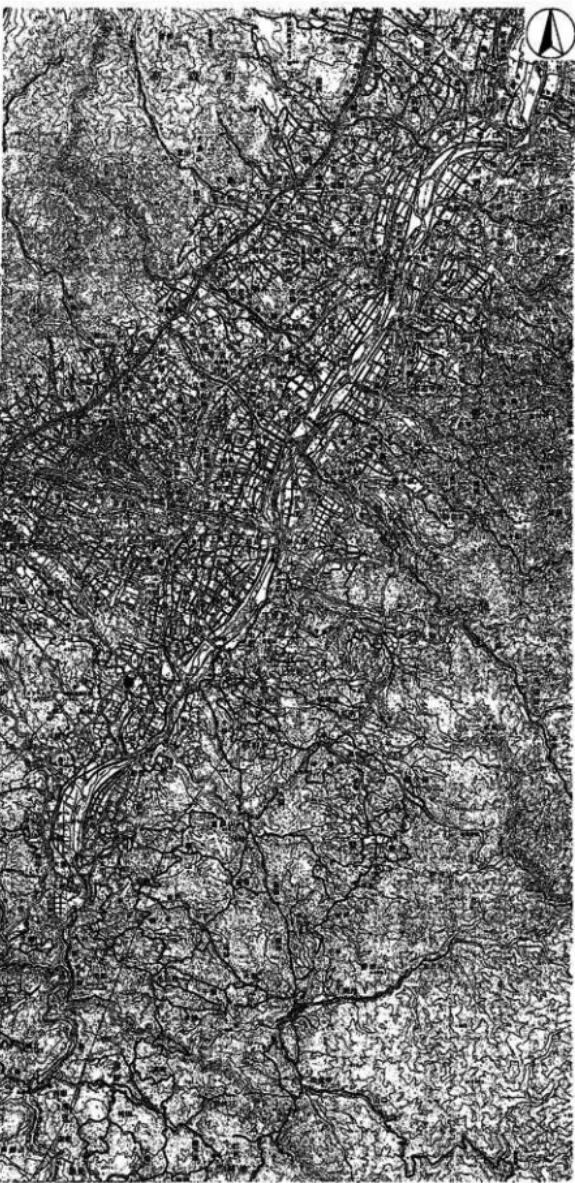
小林 正春（生涯学習課長）

吉川 豊（生涯学習課 文化財保護係長 ～平成16年度）

馬場 保之（ 同 文化財保護係 ～平成16年度、文化財保護係長 平成17年度～）

瀧谷恵美子（ 同 ）
下平 博行（ 同 ）
坂井 勇雄（ 同 ）
羽生 俊郎（ 同 ） 平成17年度～)
佐々木行博（ 同 ） ～平成16年度)
宮澤 貴子（ 同 ） 平成17年度～)





第1図 駄科権現堂遺跡位置図

0 5km

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 自然環境（第1図）

飯田市は長野県の南部を並走する木曾山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈に挟まれた飯田盆地と伊那山脈と赤石山脈とに挟まれた遠山谷とで構成され、伊那谷南半の主要部に位置している。伊那谷の中央には天竜川が南流し、国内でも有数の段丘地形を形成している。伊那谷は南北に約100kmと長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。また南は天竜川伝いに遠州地方に、西は木曾山脈を隔てて美濃に、南西は奥三河高原を経て三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、遠山谷には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代以来、石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曾両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質図（1976）によると、高位面・高位段丘・古期扇状地・中位段丘・中期扇状地・低位段丘I・新規扇状地・低位段丘IIの5つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少なく太平洋岸式気候に属するといえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

駄科権現堂遺跡・安宅3号古墳が所在する竜丘地区は飯田市街地から南に約4～7kmの距離にあり、市全域からみればやや南に位置している。標高では380～560mの間になる。東は天竜川を挟み下久堅・龍江地区に、南は久米川を挟み川路地区に、西は中位段丘から伊賀良地区に、北は毛賀沢川を挟み鼎・松尾地区にそれぞれ接している。天竜川は松尾地区までは広大な氾濫原を形成しているが、竜丘地区駄科から狭くなり、時又付近から再び氾濫原を形成しながら川路地区に至る。地区中央やや西寄りには、南北（松尾から川路へ）に走る断層により、比高差約30～50mの段丘崖があり、これを境に俗に「上段」と「下段」と呼ばれている。地区内はおよそ5面の段丘から構成される複雑な地形を呈するが、各段丘は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流に開析され、より複雑な小地形を形成している。竜丘地区的中心は下段に位置するが、天竜川狭窄部で氾濫原がないため、高燥した台地が多い。

駄科権現堂遺跡は標高約430mの低位段丘上に位置するが、南北を天竜川の支流により切られるため、東西に長い平坦面となっている。遺跡の南側を流れる新川はこの平坦面を深く開析しており、遺跡は新川に面した縁辺部にあたる。

2. 歴史的環境（第2図）

竜丘地区においては、旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。遺跡として確認できるのは縄文時代前期になってからである。

縄文時代草創期については土器片が開善寺境内遺跡で出土している。前期では上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、天竜川氾濫原から20m程の高所での人々の活動が知られる。中期には城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で集落址などが調査されている。城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡は、飯田下伊那地方では数少ない猪沢式期～藤内Ⅱ式期を主体とする集落である。在地の土器に加え、中部高地・関東系・東海系・北陸系・関西系の土器が出土しており、当地の地理的条件を物語る。中期後葉では駄科北平遺跡・前の原遺跡で集落址が確認されており、前の原遺跡1号住居出土土器は東海系が多い。後期初頭の駄科権現堂（旧宮城）遺跡の土坑出土土器もやはり東海系のものである。続く縄文時代後・晚期にかけての資料はほとんどない。

弥生時代においては、飯田下伊那地方では、その複雑な地形により大規模な水稻耕作にはあまり適さないこともあり、前・中期段階の生活痕跡は少なく、小池遺跡で条痕文土器が出土している程度である。遺跡数が増加するのは後期になってからであり、段丘上の高燥地にも集落が形成される。遺跡としては安宅遺跡・開善寺境内遺跡・小池遺跡・ガンドウ洞遺跡・大島遺跡等が挙げられる。墓制としては、後期に方形周溝墓が造られるほか、蒜田遺跡で貼石を持つ周溝墓が調査されており、また同遺跡には方墳の蒜田古墳がある。こうした墳墓形態は古墳時代にも継続することが近年の調査でわかつてきている。

古墳時代においては、前期の集落の様相に大きな変化は見られない。中・後期の集落としては、前の原遺跡・安宅遺跡・ガンドウ洞遺跡などわずかな調査例のみであるが、古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。古墳については、市内でも前方後円墳を中心としてその数は多く、前方後円墳9基、帆立貝形古墳3基を含む総数は、消滅も含めて140基余を数える。当地方の中期古墳築造は、当時の政治・経済にとって重要であった馬匹生産にかかわるものであることが近年の発掘調査で明らかとなっているが、竜丘地区の古墳はその中でも中核的役割を担っていたことが想定される。この状況は、後期に至っても塙越1号古墳・御猿堂古墳（県史跡）・馬背塙古墳（県史跡）にみられるような横穴式石室を有する前方後円墳の存在からも伺える。横穴式石室の多くは古くより開口し、出土品が不明である中で御猿堂古墳は画文蒂四仏四獸鏡（重要文化財）の出土が知られており特筆される。

続く白鳳期には上川路廃寺跡の存在が古瓦出土から推察されている。また、奈良時代から平安時代にかけてのものとしては、古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺跡・さらには上の坊遺跡で古瓦・宮洞古窯址群から埴輪が出土しており、古墳築造に替わって、新たな権力の象徴として複数の寺院建立がなされたことが想定されるが、これまでに寺院の調査事例はなく、詳細は不明である。

集落遺跡としては、安宅遺跡や前の原遺跡で、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査され



A. 安宅 1 号古墳 B. 安宅 2 号古墳 C. 安宅 3 号古墳 D. 駄科椎現堂遺跡

1. 墓越 1 号古墳
2. 横須堂 1 号古墳
3. 横須堂 2 号古墳
4. 神送塚古墳
5. 丸山古墳
6. 大塚古墳
7. 鎌清塚古墳
8. 菊田古墳
9. 塚原二子塚古墳
10. 内山塚古墳
11. 塚原 3 号古墳
12. 錦塚古墳
13. 離塚古墳
14. 塚原 11 号古墳
15. 黄金塚古墳
16. 金山二子塚古墳
17. 久保田 1 号古墳
18. 駄科北平遺跡
19. 安宅遺跡
20. 城陸遺跡
21. 久保尻遺跡
22. 内山遺跡
23. 前の原遺跡
24. 宮下原遺跡
25. 前林遺跡
26. 宮洞古窯址群
27. 小池遺跡
28. 塚原遺跡
29. 菊田遺跡
30. ガンドウ洞遺跡

第 2 図 周辺の遺跡

ている。前の原遺跡の場合、時期・性格の把握が困難であったが、 9×2 間の身舎に3面に庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。安宅遺跡では、3列に並ぶ 4×1 間、 3×1 間の掘立柱建物址群や道路とみられる遺構が存在する。

また、良質な粘土と湧水に恵まれた段丘を開析する天竜川の支流に面した地域の中には、斜面を利用して窯業生産が行われている。竜丘では駒沢川沿いには宮洞・河内ヶ洞といった須恵器生産の窯址群があり、前林遺跡のある段丘南側斜面には堤洞瓦窯址がある。

平安時代の末期～鎌倉時代には、古文書に伊賀良庄の地頭北条江馬氏によって現開善寺の前身開善寺が開かれている。幾度もの盛衰を繰り返し現在にいたっているが、室町時代に建てられた山門は重要文化財に指定されている。

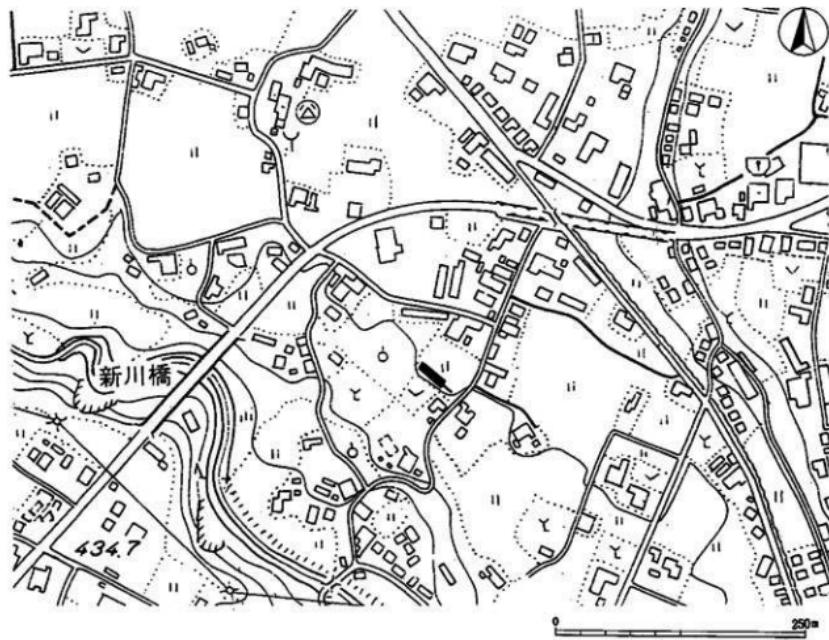
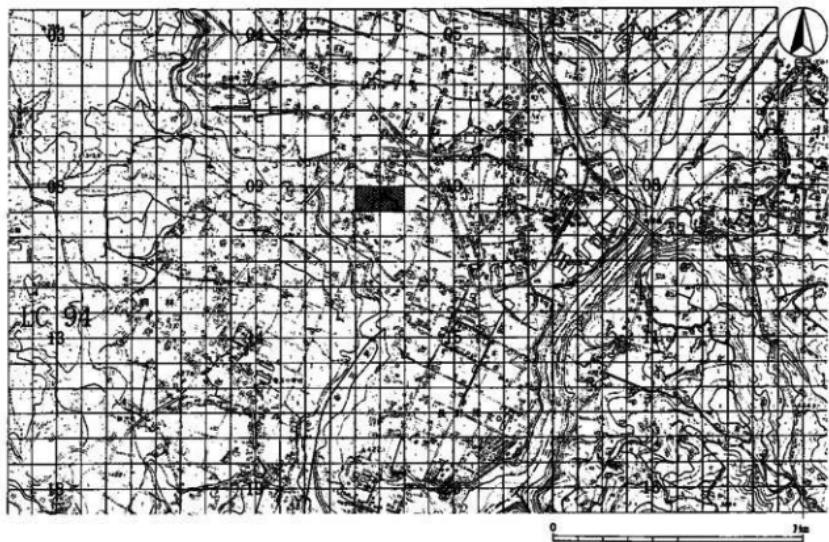
南北朝時代には、駄科の北方で伊賀良地区に近い段丘先端に小笠原氏によって鈴岡城が築城される。毛賀沢川を挟んだ対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であったが、同族の争いにより最終的には深志（松本）小笠原から鈴岡城主が入ったが武田信玄の侵攻で落城し、鈴岡城は廃城となった。武田一族も織田信長に敗れたが、信長も倒れ豊・徳時代に入ると、豊臣系の毛利秀頼が飯田城に入り、伊那全部を領有した。

江戸時代初期には、時又港が天竜川の水運を利用した飯田藩の江戸御廻米の舟出港として栄えており、その他煙草・柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出されていた。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場して通常は縮小され、竜東や南部山地への物資の運搬等を中心に繁盛したが、明治40年代以降、橋梁が次々と掛けられたり鉄道が延長されたりして、徐々に衰退していった。

このように飯田下伊那地方は原始より東西の文化の交点として、古代には東国への玄関口として、近世以降は江戸および遠州への道として栄えた土地柄であり、その中でも竜丘地区は、古代から近代にいたるまで飯田下伊那地方の中心地の一つであったといえる。

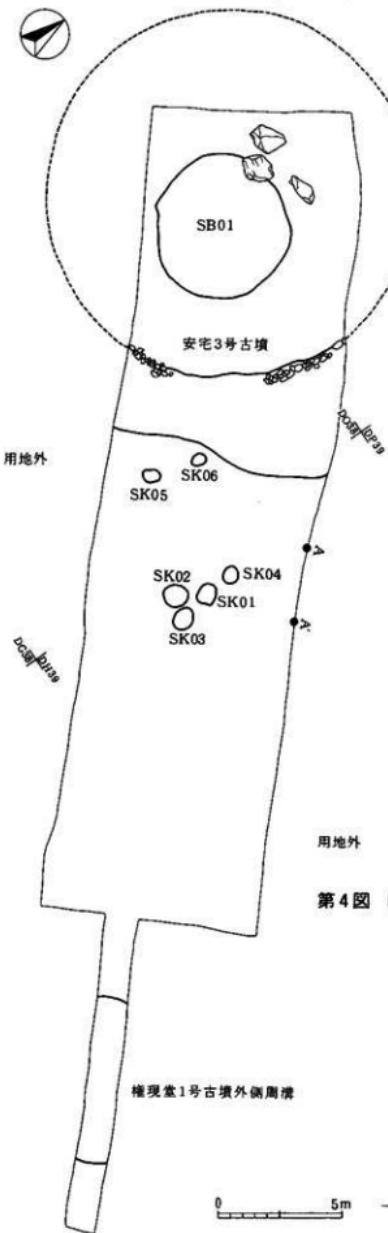
駄科権現堂遺跡では、かつて宮城遺跡という名称で発掘調査がなされ、縄文時代中期中葉・後期初頭の遺構・遺物が確認されているほか、古墳時代においては、遺跡内に全長約60mの前方後円墳である権現堂1号古墳があり、その東側には権現堂2号古墳・井ゾエ1・2号古墳・ツカノコシ古墳・神送塚古墳といった円墳が存在する。権現堂1号古墳は「下伊那史」第二巻の記載により埋葬施設等についての記録がなく、詳細が不明であるが、その他の古墳については周溝等の調査がなされており、5世紀代の円墳群と考えられる。

また、隣接する安宅遺跡では、弥生時代から奈良・平安時代にいたる集落址等が確認されている。このように、この一帯は長期にわたる集落域ないし墓域として、奈良・平安時代においては官衙の役割も含めて重要な地域であったと考えられる。



第3図 駄科椎現堂遺跡基準メッシュ図（上）・調査位置図（下）

第Ⅲ章 調査結果



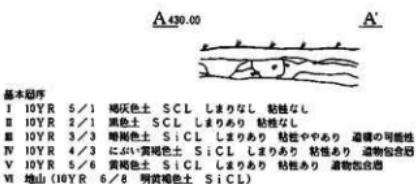
1. 遺跡の状況

今回の調査で確認できたのは、縄文時代中期の竪穴住居1軒と土坑および新発見の古墳1基（安宅3号古墳）と権現堂1号古墳の周溝と考えられる溝1条である。

2. 基本層序（第4図）

基本層序は、調査区の北東側（A-A'）に設定した。堆積状況としては、地表から30~40cmの耕土（I層）以下、地表から50cm下が遺構確認面となる地山（VI層）に至る。断面からみるとIV層上面で遺構の掘り込みが確認できるところもあるが、IV層と覆土との色調が区別し難いため、最終的にはVI層上面での検出となつた。

第4図 駄科権現遺跡調査区全体図（左）および基本層序（右）





調査区 西側



調査区 東側

3. 遺構と遺物

(1) 縄文時代

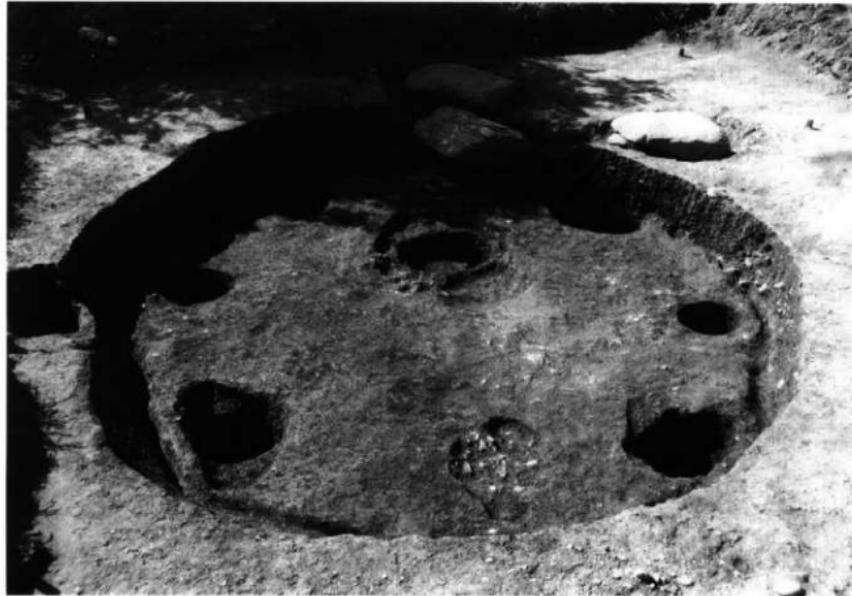
① 竪穴住居址（SB01）（第5～7図）

〔遺構〕

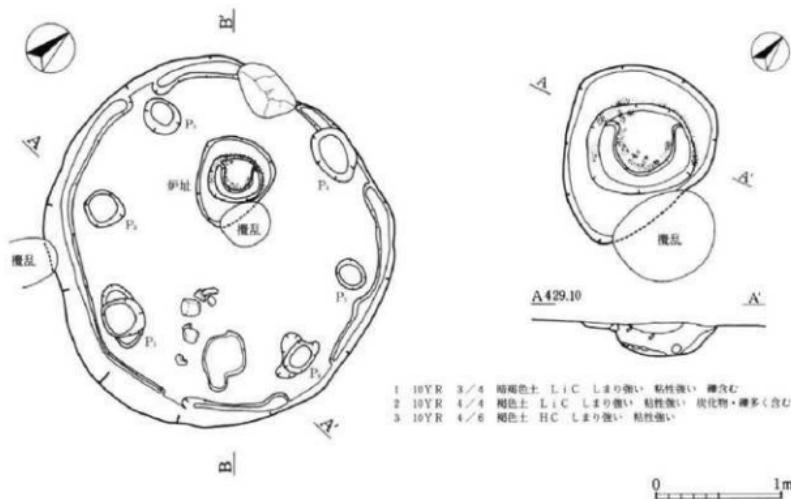
グリット番号D P34を中心に、安宅3号古墳の墳丘部分を調査した際に確認したもので、一部後世の耕作等による搅乱のため壊されている。直径5.5～6.0mの竪穴住居址で円形を呈する。遺構検出面からの深さは50cm程度で、壁面は垂直に立ち上がる。

炉址は本址の北寄りにある。炉址の中央には堅く締まった焼土があり、その周囲がドーナツ状にやや窪んでいることから、この窪んだ部分が炉石の抜き取り痕とみられ、本来は石閉炉であったと考えられる。規模は1.3×1.5mである。炉址の位置から本址の主軸方向はN40°Wになる。主柱穴は6本あり、床面からの深さは30～40cm程度である。周溝は壁面直下をほぼ全周し、床面からの深さは6～11cm程度である。炉址に対面する南側は入口になると考えられるが、ここには扁平な自然石が置かれており、入口に伴う何らかの施設の可能性が考えられる。石の下には浅い掘り込みがあるが、土器等の埋納はない。

覆土はレンズ状の堆積となる。2層からは遺物が多く出土し、その下の3層からの出土もある。遺物は比較的西側に集中している。出土状況からいざれも本址廃絶後のものと考えられる。埋甕を伴わないことから、本址に確実に伴う遺物はない。



SB01 全景

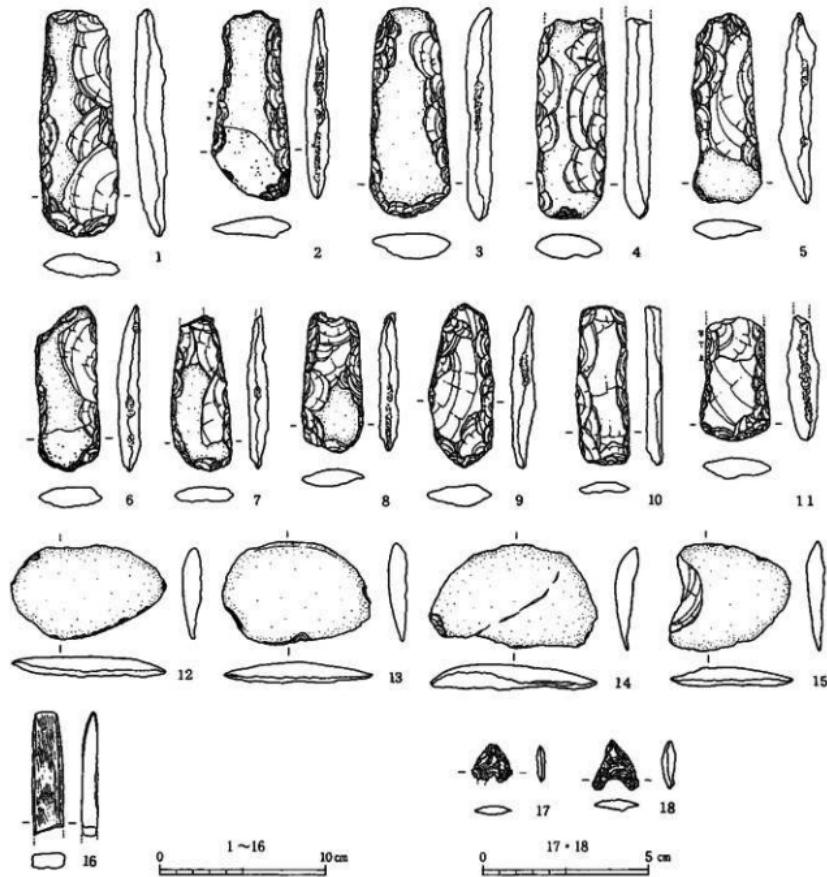


第5図 SB01(全体・炉址)



〔遺物〕

石器は、1～11は打製石斧で1～7は硬砂岩製、8～11は緑色片岩製。12～15は横刃型石器でいずれも硬砂岩製。16はノミ形磨製石斧で輝綠凝灰岩製。17・18は打製石鎌で黒曜石製。



第6図 SB01出土石器



S B01出土石器

土器はいずれも住居址覆土から出土したものである。S B01には埋甕がなく、床面上から出土したものもないことから、土器は住居址使用時のものではなく、住居址廃絶後の廃棄によるものと考えられる。土器の出土量は多いものの土器全体を復元できるものは少なく、主要なものを図化した。いずれも縄文時代中期後葉後半のものであり、住居址の年代もその時期を下るものではない。

1・2は深鉢で、比較的全体の形がわかるものである。

1は2／3が残存する。口縁部はやや外反し無文であるが、頸部には横方向の沈線が1条施される。その下のU形の沈線区画内には1条の結節縄文が充填される。加曾利E IV式系土器に比定されるが、当地方では比較的出土数が少ないものである。

2は口縁部と底部を欠き、胴部の2／3が残存する。胴部の文様は上下二段の沈線による縦長楕円形区画内に縄文が充填される。

3～11は、破片資料である。いずれもキャリバー形の深鉢である。

3・4は口縁部が波状を呈し、沈線による渦巻つなぎ弧文が施され、区画内には縄文が充填される。頸部は半月状刺突文、胴部は沈線区画内に縄文が充填される。

5・7は口縁部の楕円形の沈線区画内に縄文が充填され、頸部には半月状刺突文、胴部の沈線区画内にも縄文が充填される。

6は口縁部の楕円形の沈線区画内に結節縄文が充填され、頸部には半月状刺突文、胴部の沈線区画内にも結節縄文が充填される。

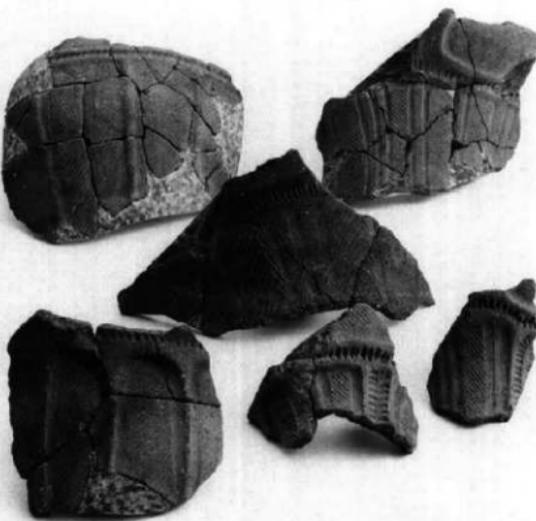
9～11は頸部から胴部にかけての破片である。いずれも頸部に半月状刺突文が施され、胴部の沈線区画内に9は結節縄文、10・11は縄文を充填する。



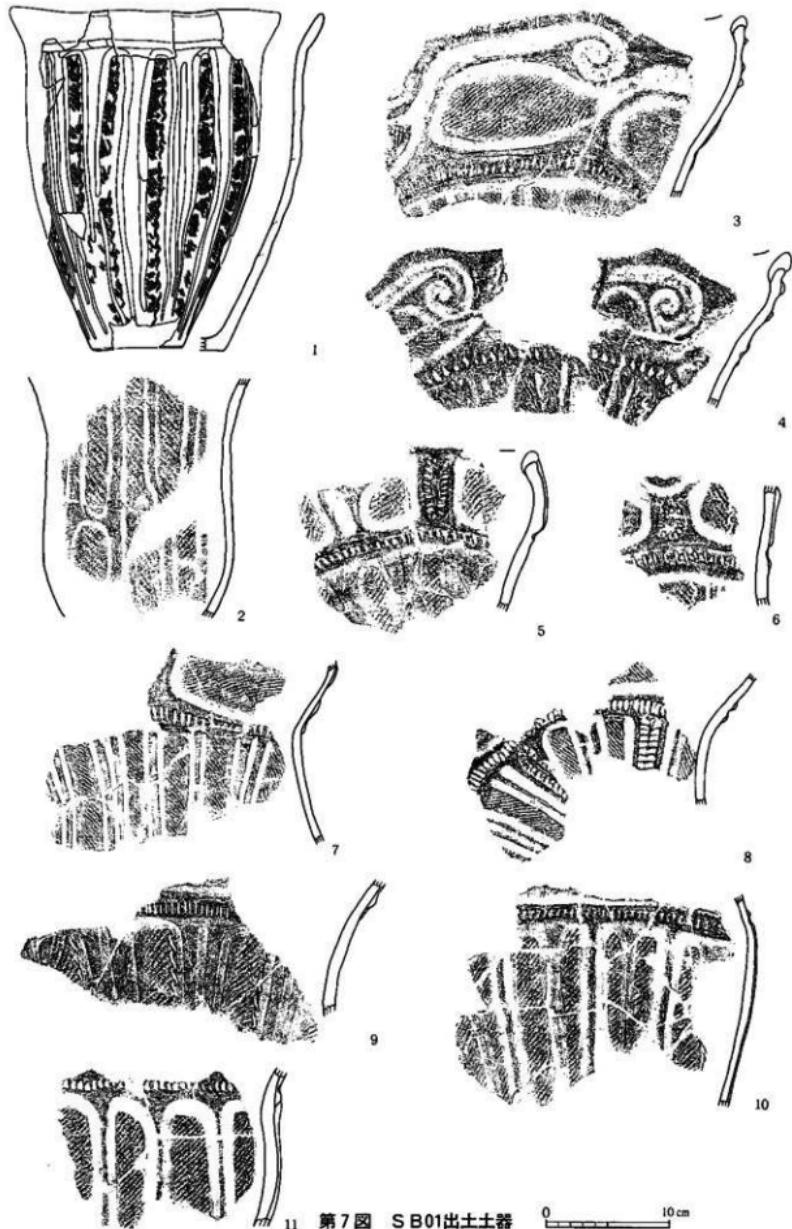
S B01出土土器



S B01出土土器



同上



第7図 S B01出土土器

0 10 cm

② 土坑 (SK01~06) (第8・9図)

6基の土坑は調査区東側にあり、出土遺物はわずかであるがいずれも縄文時代のものとみられる。集落の中心は、今回調査をした1号住居址 (SK01) よりもさらに東側になると想定される。

土坑1 (SK01) はグリット番号DK39を中心に検出した。規模は90×86cm、深さ24cmで底部が平坦で円形を呈する。土坑底部には扁平な自然石が配されている。出土遺物は縄文土器の破片がわずかにある。結節縄文が施された深鉢の一部であり、中期後葉とみられる。

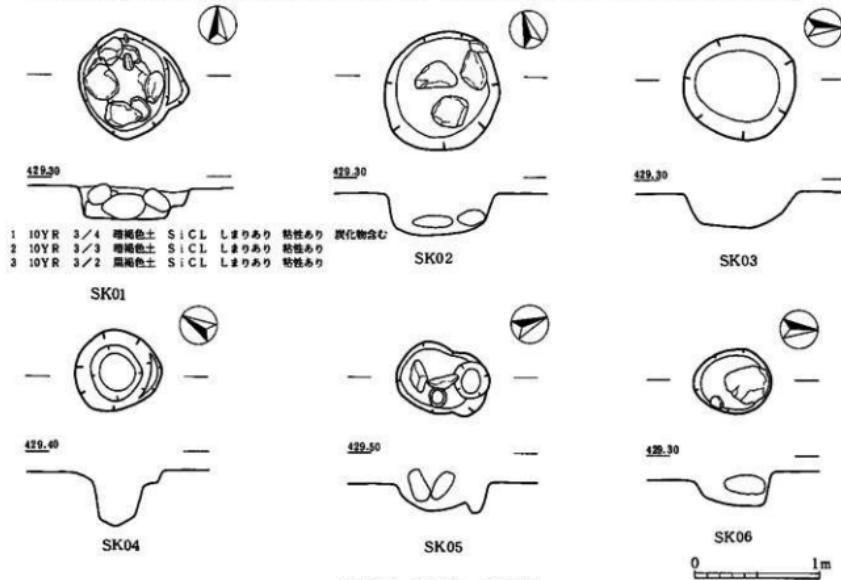
土坑2 (SK02) はグリット番号DK39を中心に検出した。規模は94×93cm、深さ35cmで円形を呈する。土坑の底部よりやや浮いているが、3つの扁平な自然石が配されている。出土遺物は縄文土器の小破片と硬砂岩製の横刃型石器1点である。土器には沈線による区画内に縄文が施された深鉢等があり、中期後葉とみられる。

土坑3 (SK03) はグリット番号DK40を中心に検出した。規模は88×62cm、深さ26cmで底部は船底形で梢円形を呈する。出土遺物は器台の一部とみられ、梢円形のスカシがある。高森町増野新切遺跡D27号住居址出土例に類似しており、縄文時代中期後葉とみられる。

土坑4 (SK04) はグリット番号DL39を中心に検出した。規模は71×70cm、深さ45cmで円形を呈する。出土遺物は縄文土器の破片が1点である。

土坑5 (SK05) はグリット番号DJ37を中心に検出した。規模は78×54cm、深さ24cmでややひょうたん型を呈する。土坑内には扁平な自然石が2つ立てた状態で配されている。遺物の出土はない。

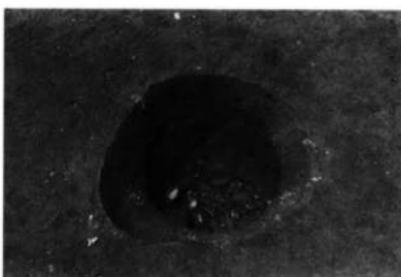
土坑6 (SK06) はグリット番号DL37を中心に検出した。規模は60×54cm、深さ29cmで梢円形を呈する。床面からはやや浮いた状態ではあるが、扁平な自然石が配されている。遺物の出土はない。



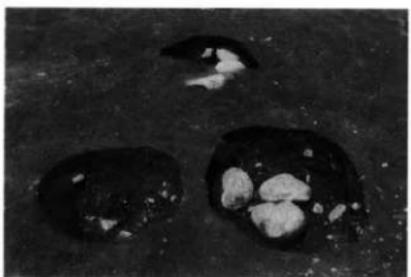
第8図 SK01～SK06



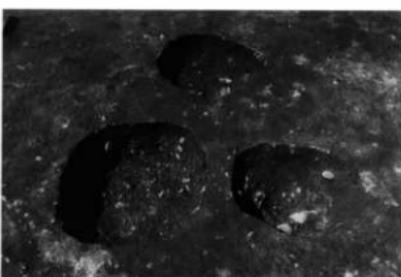
S K01



S K01



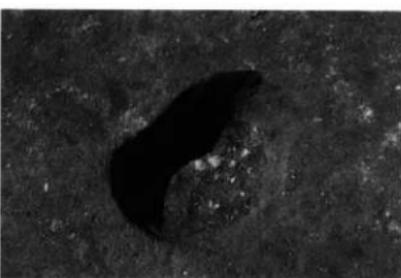
S K02~S K04



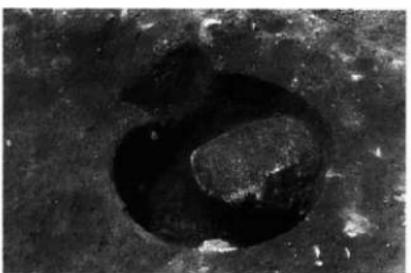
S K02~S K04



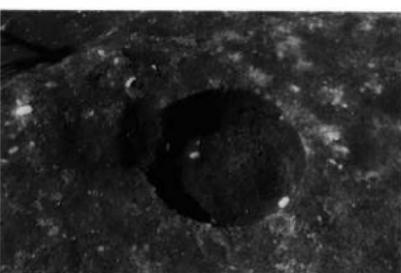
S K05



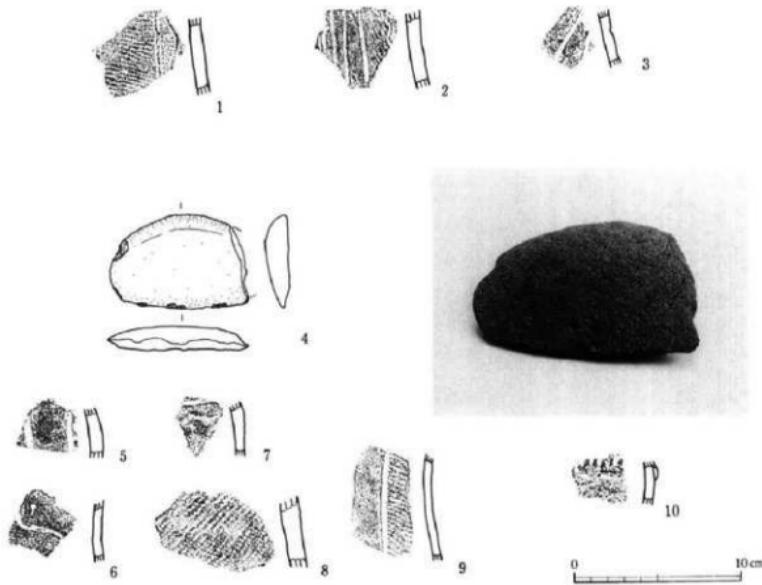
S K05



S K06



S K06



第9図 SK01 (1~3)・SK02 (4~9)・SK04 (10)

(2) 古墳時代

① 安宅 3 号古墳（第10図）

〔遺構〕

今回の調査によって新たに確認した古墳である。「下伊那史」第二巻に記載がないことから、安宅 3 号古墳と名付けた。周溝と葺石の一部を検出し、確認できた周溝は幅 3~4 m 程度、長さは南北方向に 9 m 程度である。墳丘全体の 1/6 程度であるため、墳形・規模の推定は難しいが、残存する葺石から墳丘部分の直径は 15 m 程度、周溝を含めると 20 m 以上円墳になると考えられる。

葺石は試掘の際に一部取り外してしまったが、本来は全周するものとみられる。墳丘上部が削平されているため、3段程度を確認した。石は 20~40 cm 程度のものが基本的に使われており、隙間に握り拳大の石が充填されている。根石に比較的大きい石を用いている部分もある。基本的に小口積みであるが、積み方に規則性はみられない。残存部分の葺石は地山に葺かれている。

埋葬施設は墳丘とともに削平されていたが、墳丘部分に 3 つの大型の石が残存していた。いずれも穴を掘って埋めた状態であり、本来の位置を留めているものではないが、石の大きさや周囲に同様の大型の石がないことから、破壊された横穴式石室の用材と考えられる。石は長軸 1.4 m、短軸 0.5~1.0 m 程度の自然石でいずれも変輝緑岩とみられる。変輝緑岩は天竜川沿いで確認されるが、本古墳に最も近いところで直線距離にすると 1 km 強程度である。

周溝覆土の断面観察からは、周溝の外側で旧表土の残存（C-C' 17 層）が確認できるが、墳丘部分では旧表土および墳丘盛土は確認できず、現在の耕土下が古墳の確認面である地山となることから、墳丘盛土は完全に削平され、削平は地山まで及んでいるといえる。埋葬施設の掘り方（基底部）が確認できないのもそのためといえる。

以上のように、削平により墳丘の構築方法は確認できないが、周溝は地山を掘削している。石室は位置を特定できないが、用材を確認した周溝内中央部と推測される。おそらく住居址の上に構築されていたものであろう。

「下伊那史」第二巻に本古墳の記載がなく、伝承もないことから、削平は一機になされ、その時代もかなり早い頃と考えられる。

〔遺物〕

葺石の間からは須恵器（大甕）が出土しているが、小破片のため、時期を特定できない。また、墳丘上から須恵器（甕・壺）・土師器（壺）が出土しているが、いずれも小破片で図化できるものはなく、確実に本古墳に伴うかは不明であり、時期決定の要因には乏しい。

横穴式石室が埋葬施設であるとすれば、当地方の古墳の様相及び隣接する安宅 2 号古墳との関係から 6 世紀以降の古墳と考えられる。



第10図 安宅3号古墳平面図・葺石侧面図・周溝断面図



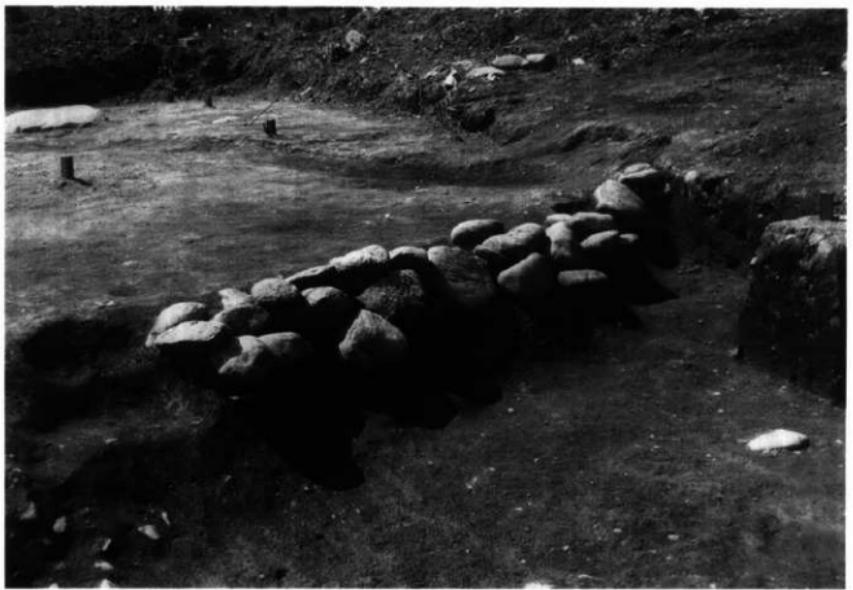
安宅 3号古墳（東より）



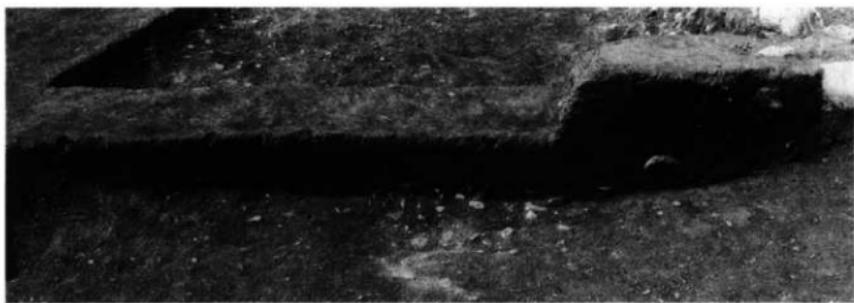
安宅 3号古墳（北より）



安宅 3 号古墳 蒼石



同 上



安宅 3 号古墳周溝断面図 (D-D')



同 上 (C-C')



同古墳石室石材

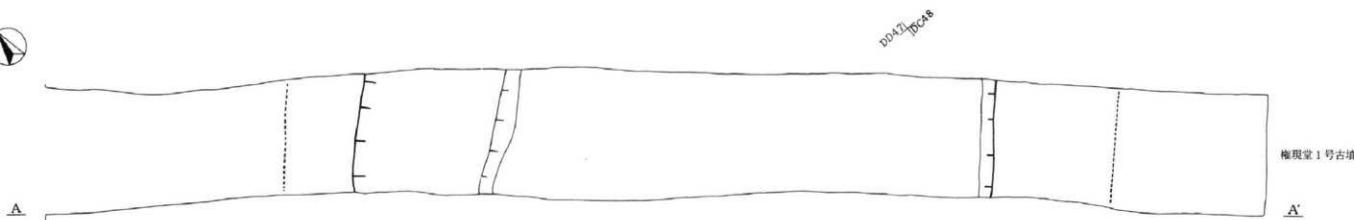
② 権現堂1号古墳（第11図）

本古墳は今回調査地点の東側に隣接する前方後円墳である。発掘調査がなされていないことから、その規模や時期については明確ではないが、現状で全長60mになる。古墳の東側では農地の区画から周溝範囲の推定が可能な部分もあるが、調査地点のある西側はその面影を留めない。

今回調査地点の東端で溝を確認した。調査区の幅が1.5m程度と狭く、ごく一部の調査であるが、古墳の主軸方向に平行してのびる溝と考えられる。溝の幅は、遺構検出面（地山）での確認では6.5m程度であるが、断面観察ではA-A' 7~10層までを覆土と捉えた場合は8.5m程度になる。周溝内からの遺物の出土がないが、権現堂1号古墳との位置関係から本古墳に関わる溝の可能性が高く、本古墳およびその周溝のさらに外側を区画する溝といった性格が考えられるが、現時点では確定はできない。今後の周辺部での調査には注意を要するところである。



権現堂1号古墳周溝（西より）



A 430.00

DD49
DD46

A'

0 1m



断面図
(北より)



同上
(南東より)

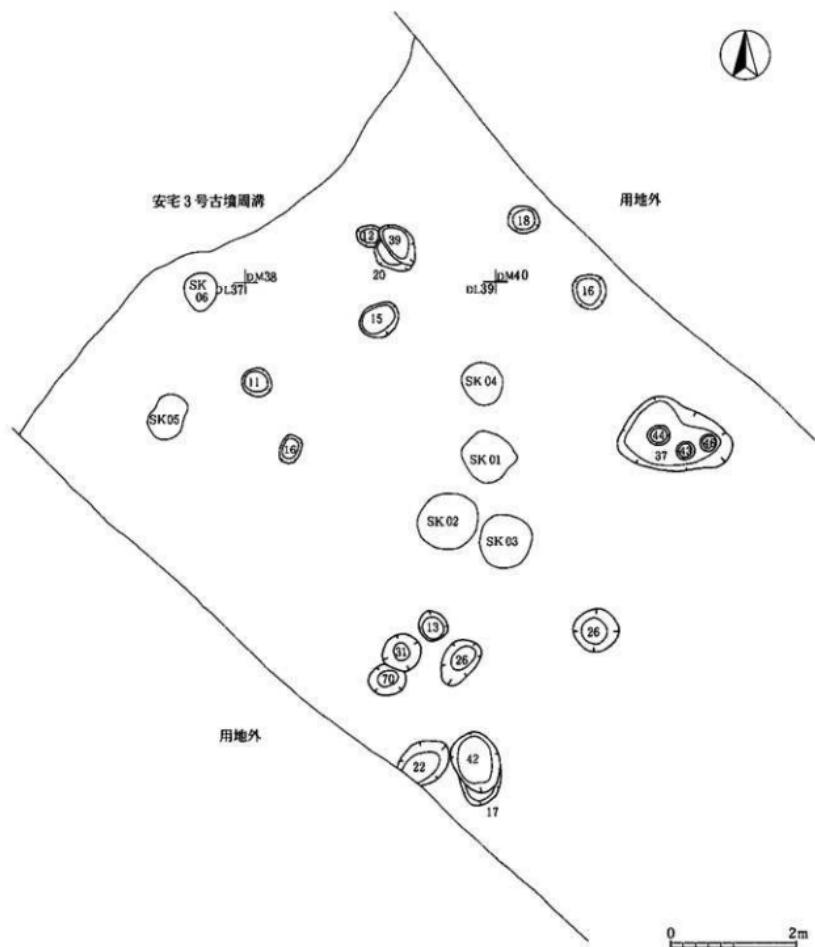
- 1 土
2 10YR 7/1 淡白色土 S. しまりやけあり 粘性なし
3 10YR 6/2 黄褐色土 CL. しまりあり 粘性あり
4 10YR 3/2 黑褐色土 (10YR 3/6 黄褐色土を含む) CL. しまりあり 粘性やあり 鉄分の沈殿
5 10YR 3/1 黑褐色土 SCL. しまりなし 粘性あり
6 10YR 2/1 黑褐色土 CL. しまりやけあり 粘性あり
7 10YR 4/1 黑色土 CL. しまりあり 粘性あり 黏土質土
8 10YR 4/6 黑褐色土 (10YR 2/1 黑色土含む) CL. しまりあり 粘性あり 岩漬葉土
9 10YR 5/9 黑褐色土 CL. しまりあり 粘性あり 黏土質土
10 10YR 4/6 黑褐色土 CL. しまりあり 粘性あり 岩漬葉土
11 10YR 2/2 黑褐色土 (10YR 5/8 黑褐色土含む) CL. しまりあり 粘性あり
12 土

第11図 権現堂1号古墳西側調査区

(3) その他の遺構・遺物

① 周辺ピット (第12図)

安宅3号古墳の東側で複数の小ピットを検出した。いずれも出土遺物がなく、時期・性格は不明である。



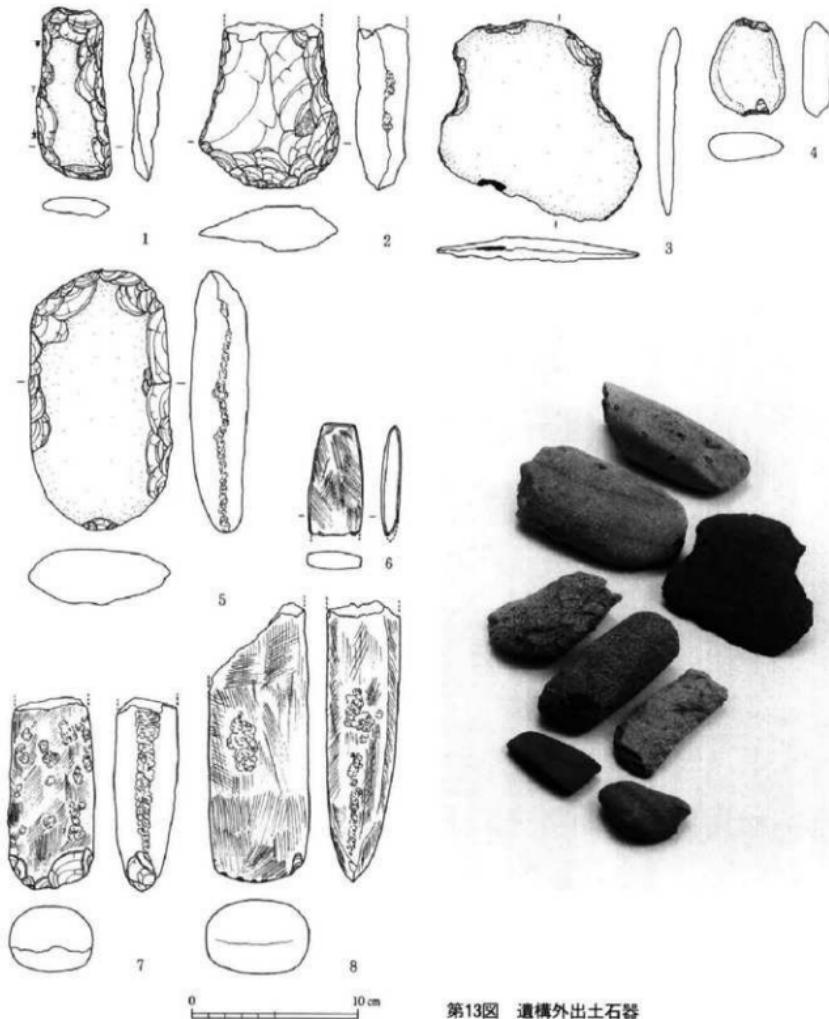
第12図 周辺ピット図

② 遺構外出土遺物（第13図）

調査区全体で縄文土器の破片が出土しているが、いずれも小破片である。

石器はSB01周辺で出土している。縄文時代から弥生時代までのものとみられる。

1・2は打製石斧でいずれも硬砂岩製。3是有肩扁状形石器で硬砂岩製。4は敲打器で粘板岩製。5は石錐で粘板岩製。6は磨製石斧で緑色片岩製。7は表面の敲打により形を整え、磨製石斧状に刃を作り出している。硬砂岩製。8は磨製石斧で輝緑凝灰岩製。



第13図 遺構外出土石器

第IV章 まとめ

駄科権現堂遺跡での発掘調査は、昭和48年に宮城遺跡として行われ、縄文時代中期中葉の3軒の竪穴住居址とツカノコシ古墳・井ゾエ1・2号古墳の3基の円墳が調査されている。また、駄科権現堂遺跡とは西側で隣接する安宅遺跡においては、縄文時代から奈良・平安時代の住居址および円墳が確認されている。安宅遺跡での縄文時代中期後葉の住居址や円墳の存在と、今回の調査で確認された駄科権現堂遺跡でのあり方を比較すると、特に縄文時代の集落域・古墳時代の墓域としては一連のものとして捉えることが可能といえる。

現時点で確認できる状況を概観すると、縄文時代中期中葉には駄科権現堂遺跡の東側（旧宮城遺跡）に中心があり、後葉に至ると駄科権現堂遺跡の西側から安宅遺跡にかけての一帯に集落が形成される。弥生時代から古墳時代にかけては、安宅遺跡が集落域となり、駄科権現堂遺跡は墓域として位置づけられるといった傾向が想定される。

ここでは、今回の調査で確認された縄文時代中期後葉と古墳時代の様相について概観し、まとめとしたい。

1. 縄文時代の集落について

今回の調査で確認できたのは縄文時代の竪穴住居址（SB01）1軒のみであるが、調査区の東側では土坑6基が確認され、出土遺物から竪穴住居址とほぼ同時期であるとみられる。

竪穴住居址は埋甕をもたないもので、覆土から出土した土器からも縄文時代中期後葉後半の時期が考えられる。土坑については、出土遺物が少ないがSB01とほぼ同時期のものとみられる。土坑の性格については、今回の調査では明確にできなかった。駄科権現堂遺跡のある段丘より一段下に位置する城陸遺跡は縄文時代中期中葉の集落遺跡であるが、この遺跡の土坑と比較すると、1m以下の円形ないし梢円形の形態であり、石が配されているという点で共通点がみられる。城陸遺跡では土坑のいくつかを墓の可能性があるとしているが、土坑内の土器に意図的な破碎によるものと考えられるものがあるなど、駄科権現堂遺跡でのあり方とは異なるものもあり、一概には比較できない。しかし、今回の調査で確認された土坑が形状等から貯蔵穴・落とし穴といった性格が考えにくことから、墓の可能性も否定できない。いずれにせよ、土坑内遺物の出土状況や居住空間との位置関係からの検討が必要であり、今後の周辺で調査の際の検討課題としたい。

集落の範囲は調査面積が狭いため明確ではない。ただし、調査区の南側は100m程で新川に面した段丘崖となること、西側隣接地（現在果樹園となっている）では縄文土器等が採取されること、土坑との位置関係等から、集落が環状ないし馬蹄形をなすとすれば、今回調査地点を南端とし、集落の中心はさらに北側に広がるものと考えられる。つまり、遺跡としては駄科権現堂遺跡と安宅遺跡にかかる一帯が想定されることになる。

さらに、周辺遺跡での発掘調査結果との比較で集落変遷をみると、縄文時代中期中葉においては駄科

権現堂遺跡東側（旧宮城遺跡）およびさらに東側の一段下の段丘に位置する城陸遺跡に中心があり、中期後半には駄科権現堂遺跡およびさらに北側の駄科北平遺跡に中心が移動するとの想定ができるようである。しかし、両者は中期中葉と後葉とで空白時期があり、ダイレクトに集落域の移動があったとは考えられず、周辺遺跡でのさらなる資料の増加、個々の遺跡の詳細な時期についての検討が必要であろう。

2. 古墳について

今回の調査では古墳1基を新たに確認し、安宅3号古墳とした。古墳名称を「安宅」とした根拠としては、今回確認された古墳の北西側約100mに安宅1号古墳が存在することによる。この古墳は『下伊那史』第二巻に記載がある円墳で、これによると現存する規模は東西径8m、南北径11m、高さ1.5～3mになる。出土遺物について知られていないことから築造時期については不明である。また、安宅1号古墳の南東側では、昭和63年に実施した集合住宅建設に先立つ調査で周溝の一部が確認され、安宅1号古墳との位置関係から安宅2号古墳とした（第15・16図）。この古墳の推定墳丘径は15～16m、周溝を含めると23m程度になる。周溝内から出土した遺物には、土師器（内黒坏）、須恵器（長頸壺・甕）、埴輪片がある（第17図）。埋葬施設は削平により確認できなかったが、土器は6世紀前半から7世紀にかけてのもので、その時期から安宅2号古墳は6世紀に築造された横穴式石室を有する円墳で、7世紀まで追葬が行われていたと推定される。安宅3号古墳は埋葬施設を削平により確認できなかったが、横穴式石室の可能性が高いことは第Ⅲ章で述べたとおりである。また、安宅3号古墳の墳丘径は15m、周溝を含めると20m以上になり、安宅2号古墳とほぼ同規模の古墳になる。横穴式石室の痕跡を残すものは安宅3号古墳のみであるが、1号から3号までそれぞれ約50m間隔で並んでおり、前述の状況から、これら3基が6世紀以降に築造された横穴式石室を有する古墳群（安宅古墳群）であるとの推定が可能である。

これに対し、調査区東側にある前方後円墳の権現堂1号古墳をはさんで反対側には権現堂2号古墳・井ゾエ1号・2号古墳・ツカノコシ古墳・神送塚古墳といった円墳群がある。井ゾエ1号・2号古墳・ツカノコシ古墳は発掘調査がなされているが、いずれも上部が削平されているため埋葬施設は確認できていない。井ゾエ1号古墳は墳丘の直径16.4m、須恵器・土師器・鉄劍・鉄鎌が出土している。井ゾエ2号古墳は墳丘の直径約13m、須恵器・土師器破片が出土している。ツカノコシ古墳は墳丘の直径16.5m、須恵器・土師器・直刀・鉄劍が出土している。神送塚古墳は『下伊那史』第二巻によると、石室をもつ大規模な円墳であったとされ、発掘調査はしていないが六鈴鏡・珠文鏡・直刀・鉄劍・鉄矛・鉄鎌・鉄鎌・轡・三角板紙留短甲があるほか、陶製の馬が出土しているとされる。これらの円墳群は出土遺物から5世紀後半の年代が推定される。権現堂1号古墳は全長60.9mで、『下伊那史』第二巻によると、明治・大正時代に後円部を掘り下げたところ鉄劍・直刀・轡・土師器・須恵器・円筒埴輪が出土したとされ、石室らしいものは確認されなかったということである。権現堂2号古墳ほかの円墳群はいずれも5世紀後半に比定されるが、権現堂1号古墳は時期の特定が難しく、6世紀代の古墳との見方もなされているが、前述のように大型の石がなかったということから、円墳群と同様、5世紀代に築造された古墳である可能性が十分あり、西側の安宅古墳群とは築造時期の異なる別の古墳群と考えられる（第14図）。



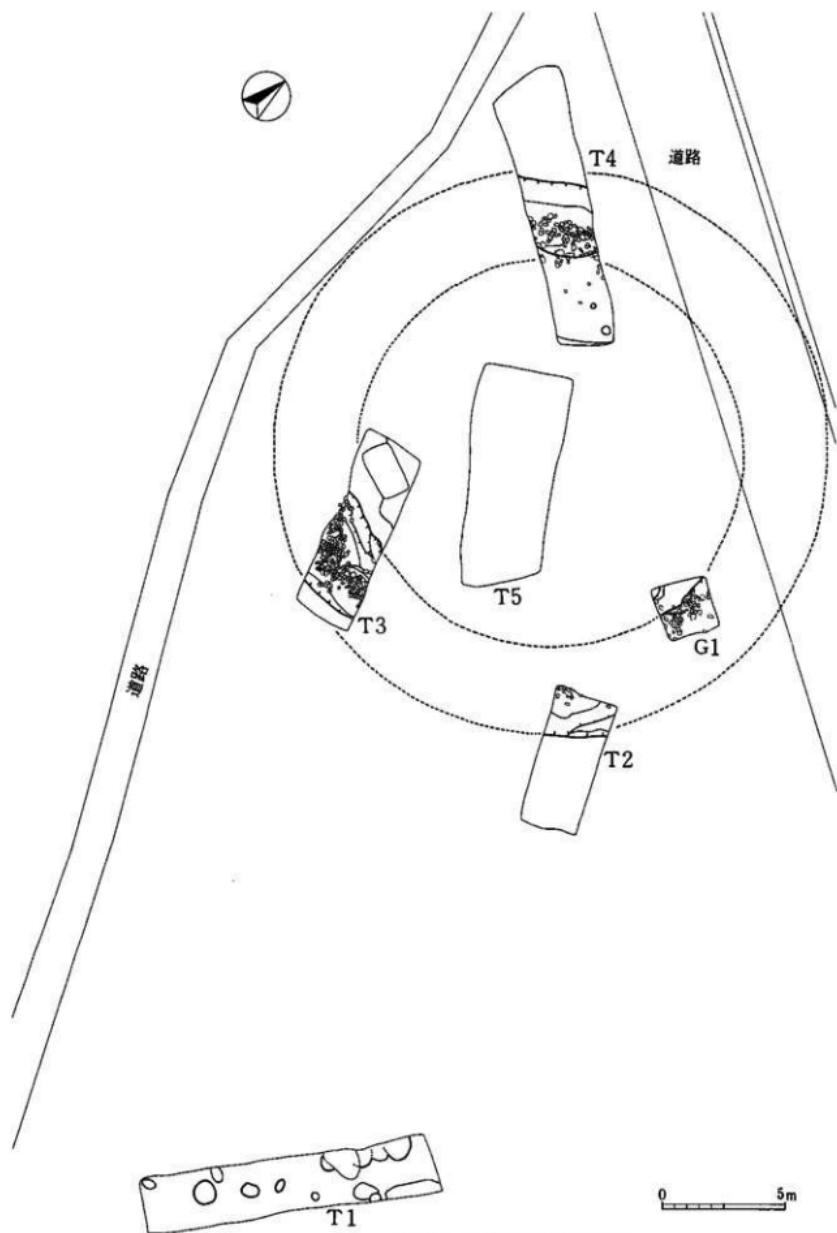
安宅古墳群の北側約400mのところには横穴式石室を有する塚越1号古墳があり、安宅古墳群との間にトヤ田古墳・丸畠町古墳・井間古墳といった円墳が存在する。いずれも詳細は不明であるが、安宅古墳群との位置関係から、6世紀以降の古墳群と捉えることも可能である。

こうしたことから、権現堂1号古墳を盟主とする東側の5世紀代の古墳群がある一帯から、安宅古墳群さらに北側の塚越1号古墳にかけての6世紀以降に築造された古墳群がある一帯へと墓域が移動したとの推定が可能であるが、現時点では比較資料も少なく、墓域変遷については今後の課題である。

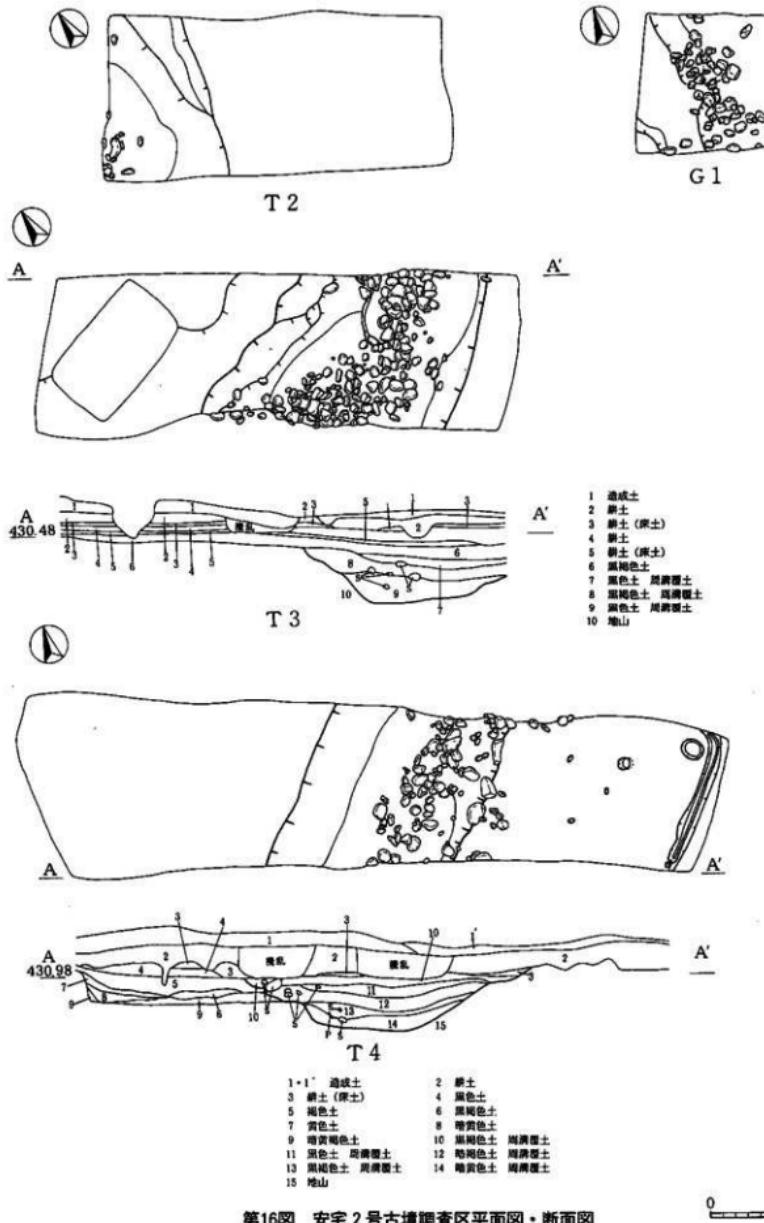
第14図 周辺古墳配置図

参考文献

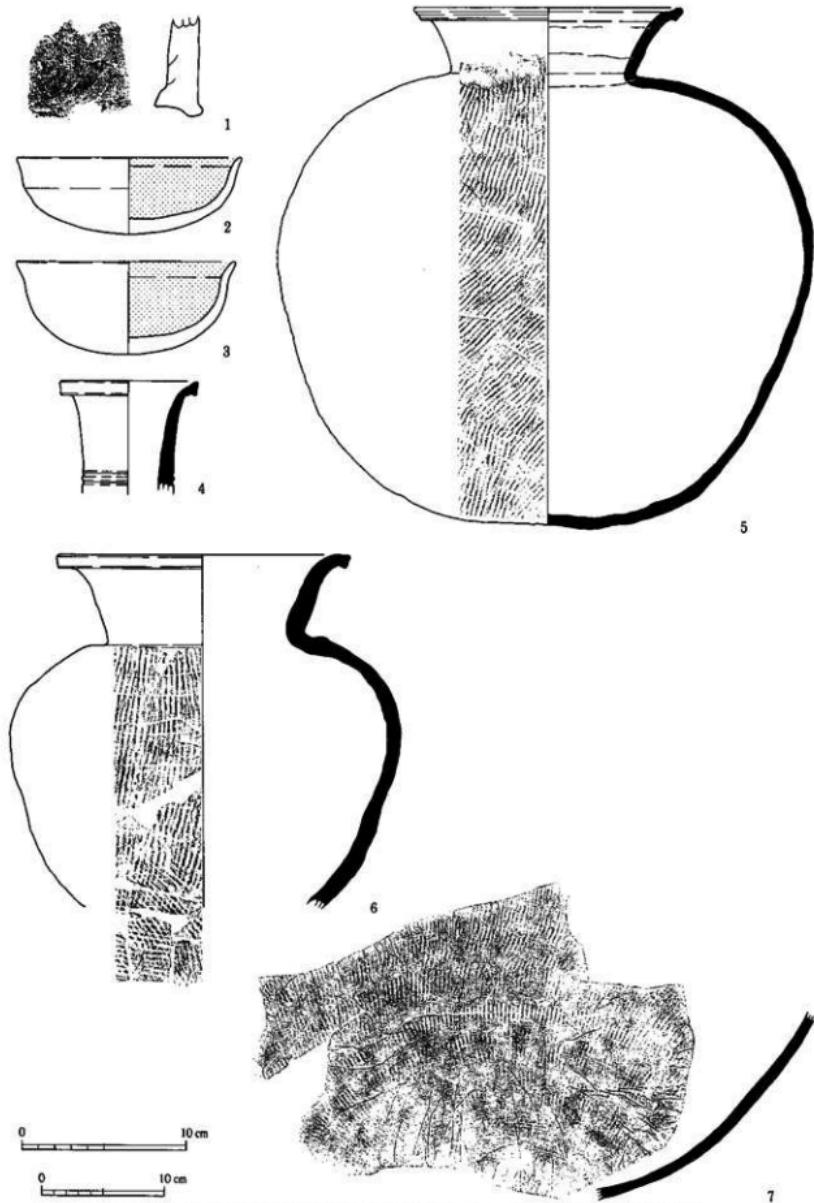
- 下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史』第二巻
- 長野県飯田建設事務所 1969 『安宅・大島』
- 飯田市教育委員会 1974 『小池・宮城・神送塚』
- 飯田市教育委員会 1976 『駄科北平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1995 『安宅遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 『城陸遺跡』
- 設楽博己 1981 「下伊那地方における前方後円墳の実態」『信濃』33-10
- 吉川金利 2003 「下伊那綱文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102



第15図 安宅 2号古墳全体図



第16図 安宅2号古墳調査区平面図・断面図



第17図 安宅2号古墳出土土器 (T 2(1) T 3(2~4) T 4(5・6) G 1(7))

報告書抄録

ふりがな	だしなごんげんどういせき あだかさんごうこふん							
書名	駄科權現堂遺跡 安宅3号古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	瀧谷恵美子							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
駄科權現堂遺跡 安宅3号古墳 (付 安宅2号古墳)	飯田市 駄科 1242-3	20205		35° 28' 21"	137° 50' 01"	平成16年 4月16日～ 5月14日	304.6 m ²	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
駄科權現堂遺跡 安宅3号古墳 (付 安宅2号古墳)	集落 古墳	縄文時代 古墳時代	竪穴住居址 土坑 円墳	縄文土器・石器 土師器・須恵器			横穴式石室	

駄科權現堂遺跡 安宅3号古墳

2006年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印 刷 株式会社秀文社

